Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-16

<紹介及批評>大熊信行氏著『マルクスのロビンソン物語』

宮田，喜代藏

(Citation)
国民経済雑誌,48(2):317-324

(Issue Date)
1930-02

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00054223

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00054223

KOBE UNIVERSITY

紹介及批評

大熊信行氏著『マルクスのロビンソン物語』

宮田喜代藏

大熊教授の配分學說がはじめてわが學界に問はれてからなほ日は淺いが、その間になしとげた進展にはめざましいものがあつた。むろん同學說の全き展開は今後に期待されてゐるが、教授はたまたま外遊を機として一應いままで發表された重要な勞作をまとめて公にされた。新著は題して「マルクスのロビンソン物語」（昭和四年十月發行　同文館　三一四頁　定價二圓八十錢）といひ、著者の風格を偲ばしめる高雅な裝幀をこらしたものである。全卷にみなぎる著者の人間的な親しみと、魅力に富んだ筆致とはともに多くの人々をたやすく配分學說の理解に導きいれるに役立つであらう。

本書の收めるところは、(一)マルクスのロビンソン物語、(二)配分原理、(三)配分原理の擴充、(四)配分學說史考の四篇であつて、いづれも配分原理の展開といふことを共通の課題とせるものである。そのうち第一、第三、第四章は配分原理が今日までの經濟學のうちでいかなる程度において適用をうけつつあつたかを吟味せんことを主要な課題とせるものであり、第二章は著者自らが勞働價値說と限界利用說との綜合的な體

系をうちたてんとする一つの試みである。

一

巻頭の「マルクスのロビンソン物語」は曾つて「改造」誌上に發表されて注目を惹いた論文である。マルクスの價値學說がいかなる形態において配分學說を包藏するかを吟味したものである。教授は先づ資本論の根底に一個のロビンソン物語の埋められてゐるのを見出し、これを明るみにとり出してその本體を吟味してゐる。すなはちもともとロビンソン物語を最も痛く排撃するものの如く考へられてゐるマルクス經濟學の根底に一個のロビンソン物語が存在しており、しかもそれが彼の全理論體系の出發點をなしておるといふことは洵に奇怪至極のことであると。がこれに對して教授は『マルクスの客觀主義的・社會的觀點は不可避的に全體的なものの把握を內含し、そしてその全體的なものは封鎖的自己完了的なものでなければならず、そしてその最も單純な形態は理論上必ずや孤立人の總勞働でなければならぬ。すなはちマルクスは社會的全體的なもののエレメンタルな形態を求めて期せずして個人に到達し』（七四）孤立人ロビンソンの生活秩序を見出したのであると明快な解答をあたへてゐる。教授によればマルクスはロビンソンが彼の總勞働を彼の活動總部門に配分するその配分のうちに經濟理論的な全體性の存在を發見したものであり、このロビンソン物語こそはいはゆる配分法則の存在を指摘せんことを目的とせるものなのである。

次いで教授はマルクス經濟學において展開されてゐる「社會的總勞働の生產總部門への配分を現實する法則」の吟味に移り、この法則が『マルクスの體系を支持する隱然たる一個の柱』でありながら、『マルクスによつて少しも力調されず』、『時としてはその存在さへ否定され易い』のは何故かを尋ねて曰く、それはマルクス經濟學の目的が歷史的な發展法則を發見し、遂に

は近代社會の經濟的運動法則を曝露することにあるがために、かかる非歷史的な平均法則が研究の目的外に排除されたのであると。しかしこれに對し教授は特別の見解を示してゐる。『マルクスにおけるいはゆる『經濟法則』が歷史的法則であり、生物學的な法則であるといふことは正しい。だがそれはマルクスにおいて別に物理學的な平均法則の存在することを否定するものであつてはならない。』(二二三)となし、マルクスが社會的勞働の正常配分比に關して述べた非歷史的な『自然法則』を指摘した。教授はマルクスがこの自然法則についてそれは『決して社會的生産の一定の形態によつて廢除されるものではなく、』その形態の異なるにしたがつて『ただその現象の仕方を變ずるのみ』であると云つたのを引用して、『しからばマルクスにおいて、歷史的な法則以外に、非歷史的な法則の存在が認められてゐるといふことは實に明白であり、そしてこの法則が、自然經濟、交換經濟乃至計劃經濟等あらゆる形態において必ず自らを貫徹するといふことも疑ふべき餘地がない』(二一七)と。しかしてマルクスにおけるこの非歷史的な自然法則こそいはゆる配分法則なることは言ふまでもない。

教授は配分法則がマルクス經濟學においていかなる適用をうけてゐるかを明かにしたのち、最後にマルクスの配分理論の限界を明かにした。まづ教授はマルクスの說明においてロビンソンの時間配分が生産的な活動諸部門のみを對象とし、享樂それ自らを目的とする活動部門を問題外においてゐることを指摘し、これは畢竟するにマルクスが人間生活の最も根本的な配分總量たる時間と精力との第一次的な配分を看過してゐるがためであると難じ、ここにマルクスの『科學的分析が挫折した』と言つてゐる。次いで教授はマルクスが各種の活動部門に配分すべき勞働時間の範圍の大小を決定するものは『目的とする効果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる』と說明せることを指

摘し、『いまここに克服すべき困難の大小とはマルクス、ロビンソンにおいては支出すべき勞働力の大小の意味に外ならないからして、ひつきようマルクスはロビンソンの活動諸部門に配分さるべき勞働時間の範圍の大小を決定するものは、目的とする利用上の効果を得るために必要とする勞働時間の範圍の大小であるといふことになり、ここに殆んど同義反復におちいるのを免れない』と難じてゐる。（七一）もつともこの同義反復において『勞働配分の現制者は勞働そのもののみに存するのではなく、勞働諸部門においてその配分を要求しつつある「利用上の効果」であるといふことが幾分なりとも指示されてゐる』（七一）にすぎないが、しかし『これこそ實にカール・マルクスにおける配分理論の極限である』（七一）もしこの極限を超えてさらに進まんがためには、ゴツセンの法則から學びとつた新しい分析方法による必要があると。かくして教授のロビンソン物語はマルクスの配分理論とゴツセンの法則との間にいかなる内面的關聯性があるかを暗示し、勞働價値論と限界利用説との綜合の必要と可能とを示すといふ重大な役目を果して終りを告げたのである。

二

そこでこの物語に續く第二章において、教授自らゴツセン及びこれに續く限界利用派から學びとつた新しい分析の方法によつて兩價値説綜合の雛形を提出せんと試み、次いで第三章においては兩價値説の最も深遠なる綜合のうへに立つと認められてゐるマーシャルの體系において、配分原理が事實いかに展開されてゐるかを吟味することによつて兩學説綜合への目的に接近せんと試みてゐるのである。それでは教授の兩學説綜合の試みはどんな特色をもつてゐるのか。

教授は曰ふ。『いかにも利用説と勞働説とが一見あひゆるさぬ様相を呈し、兩説の歴史的並びに理論的對立がいまなほ強調されてゐることは事實である。だが前

者における推理の一到達點であり且つ高次の一法則であるところの限界利用均等の法則をもつて配分の學理であるとし、これを主觀學說の全思想から捩ぎはなして我等の手に收めつつ Ricardo 價値說のなかに再び歩みいるときには、意外にもこのあたらしい學派の基礎的原理は舊學說に代位すべき性質のものではなくして、却て舊學說のなかに攝取しつくさるべきものであることを發見する。』(一七三)かくして教授は主觀學派の基礎法則に新らしい客觀主義的表現をあたへ、これを勞働價値說に攝取することによつて兩學派を綜合せんと試みたのである。これと同時に教授は兩說の『對立には理論を超えた階級的反撥と意志の對抗がかくれてゐる』(一一七)が、自分は『おのおのの體系の基礎理論であるところの勞働價値思想並びに限界利用均等思想を抜きとり來たつて、その階級的色調を帶びざる純粹の原理において兩者をつき合せ、その統合を試みようとするものである。』(一一六)とその態度を明かにしてゐる。

さて以上の兩價値說統合の試みは今日では次第に教授にとつて『配分學說の綜合的把握のために必要なひとつの課程としてのみかへりみられる』やうになつてゐる。そこで私も教授に伴つて配分學說それ自身の理解に移つてゆかう。

三

『經濟學上もつとも新らしく、そして隱約のあひだにはその成立もつとも古く、そしてもつとも重要な觀念は配分觀念である。かくいふのは、過去二世紀に亙る科學としての經濟學のあらゆる理論的體系の批判によつて得られる一つの究竟的な結論である』(一一七)と、いま先づ配分觀念が新しいといふ意味は『その學說の成立または法則の發見が新らしいとの意味ではなくして、箇々別々に成立し發展してゐる諸學說を目して同一眞理の種々なる表現であると認める一つの方法が新

らしいとの意味である。配分觀念はそれらの諸學說を或るただ一つの角度から理解することによつて得られたところの一箇の綜合的な觀念である。新らしいのは發見そのものではなくして、箇々の發見を統一しなければやまぬところの包括的な意識的な仕方をもつてする取扱ひそのものである。いなかかる取扱ひは經濟學の現狀において、いまだ何人によつても試みられたことなく、今日以後に期待されなければならぬ。』（二一九）また配分觀念がその成立がもつとも古いといふのは『配分觀念は、經濟學が科學として成立すると同時に、そして事實上あらゆる學派の體系を形成する脊柱として、存在し來たつた。』（二二〇）といふ意味においてである。なんとなれば『配分學說は均衡說であり、そして經濟學の體系はこの均衡思想なしに形成されることをえなかつたからである。經濟學上の二大學派はともにこの配分學說を脊柱とすることによつて、その理論的體系を形成したのであり、また現に形成しつつあるのである。』（二二四七）と。

いまここに教授の提唱する配分學說とは經濟學上における二大學派を『同時に一つの角度から互に反照せしめることによつて、相矛盾する二大學說としてではなしに、相並立する二種の配分學說として綜合的にこれを取扱はうとする立場から生じたところの全く新らしい名稱である。』（二二二）しかしてかかる『配分學說は、經濟量配分の均衡に關する一切の思想を包括する。』まづ第一にそれは均衡思想であり、第二にそれは經濟量を前提とし、第三にそれは適用の特定分野をもつてゐる。曾つて教授はかう言つた。『配分原理は諸財獲得乃至諸享樂の普遍的手段としての素材、すなはち時間、勞働力、原料、貨幣等が與へられたる分量として想定されたとき、その總量が欲望充足の各部門にむかつて配分さるべき比率決定の原理である。この原理は今日までのところ主觀學派の體系においてわづかに個々人の消費圈内に跼蹐せしめられてゐたが、』いまや

吾々はかかる狹い適用から解放して『この原理を先づ孤立經濟においては生産消費の兩秩序を一如たらしめる基本原理として把握し、社會經濟においては需要供給の全面を照應せしめてこれを一貫する脊柱的原理として把握』（一三五―六）せんとする課題に直面してゐるのであると。

四

私は經濟學の研究がともすれば言葉に囚はれて肝心の事實を正しく見ることを忘れ、ために經濟上の根本問題を見失つてゐたことを遺憾に思つてゐた。この意味において私は大熊教授の配分學說がいはゆる根本概念から解放され、直接に經濟上の根本問題を把握し、そこから出發してこの根本問題にかかはらしめながら經濟的事實の全關係を說明して行つてゐることに畏敬を拂つてゐる。次ぎに私は教授の把握した配分はたしかに經濟生活における最も根本的な事實であり、したがつて教授がこの正しい根本問題を意識的に經濟學の表面にもち來り、配分原理によつて經濟生活の理論を體系づけようとしてゐることの正しさを充分に認める。更に從來の經濟學における基本法則を配分法則なりと解し、これらの諸學說を配分といふ角度から再吟味せんと試みてゐることは充分に意味をもつてゐる。これらによつて經濟生活の一つの最も根本的な問題の所在とそのもてる意味とが明瞭にされたことは貢獻である。最後に配分學說が教授の鋭い緻密な分析に基礎づけられてゐることは何人も直ちに見出すごとくであるが、私はこの學說はまた教授の豐かな人間觀、生活に對する直觀と深いところで握手してゐるのを感得する。配分學說は大熊教授の「血と肉との學問化したもの」である。

配分學說が教授自らのうちに進展して來たあとを顧みるのに、「勞働の苦痛」觀から超脫して費用の客觀的見解に到達して、はじめて勞働價値說と限界利用說と

の綜合的體系が明かな姿をとつて現はれ、而かもこの綜合說から拔け出して遂に配分勞働說の綜合的把握に到達したものである。またその構成においても、配分學說は兩價値說の綜合的把握のうへに立ち、この綜合說は客觀的費用觀を前提としてゐる。配分學說の今後の發展の過程において、私はまづ同學說がその適用を益々ひろく幾多の分野に擴充して行つて「その體系がいよいよ完成にむかつて接近してゆく」ことを期待するとともに、それがきそづけとしての兩價値說綜合の試みそれ自身に對して多大の關心をもつてをり、今後勞働價値說てふ縫ひあがらざる衣服が限界利用說てふ針又は絲によつていかに縫ひあげられるか、その仕上げぶりに多くの期待をかけてゐる。しかもなほこれらの前提たる費用觀において「いまなほ不明の點の遺されてゐる」ことを感じ、今後一層詳細な說明を待つものである。ともかく配分學說の全き展開は今後の發展にまつべきものである。いまや經濟學發祥の地にあつて、ひたすらに古來の學者の思想のあとに深く入りこんでゐる教授の健在をはるかに祈つてこの紹介の筆を擱く。

（一九二九・一二・一〇）